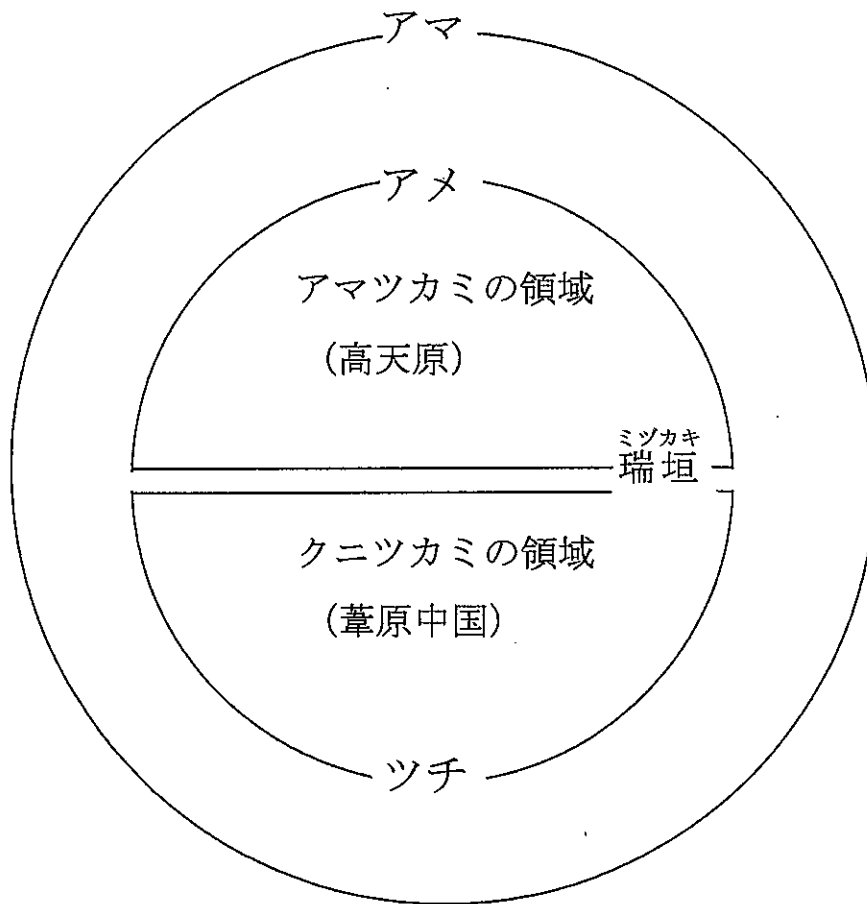


コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	アマノイハヤ (天石屋)	全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



- 「高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。
- 現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の中津国^{ナカツクニ}) と幽界魔境 (マガツビの領域、黄泉国^{ヨモツクニ}) とに分かれている。
(第一版を参照)

「極大極小」

⑤の段階

人間の身では理解できない。

⑥の段階

アマノイハヤト

(人間の認識能力の限界)

「最大最小」

⑦の段階

人間の身でもかろじて理解できる。

⑧の段階

最大最小の神界楽土

歪められることなく

きれいに直結できた時

無宇宙の實在が持つ諸力が

そのまま人間世界に実現する。

人の身ながら
神となる。

この上このまま
高天原

祿

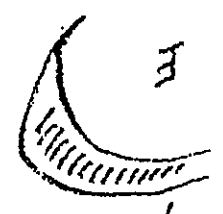
今乃現爾

留給

自今日

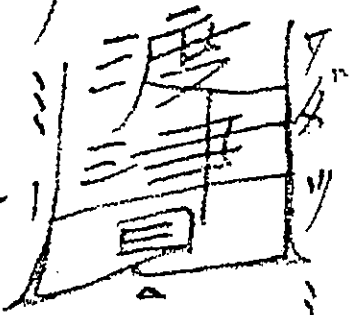
五

五日



五夜

止



耳



留

海爾

真清



中



乃水字汲美

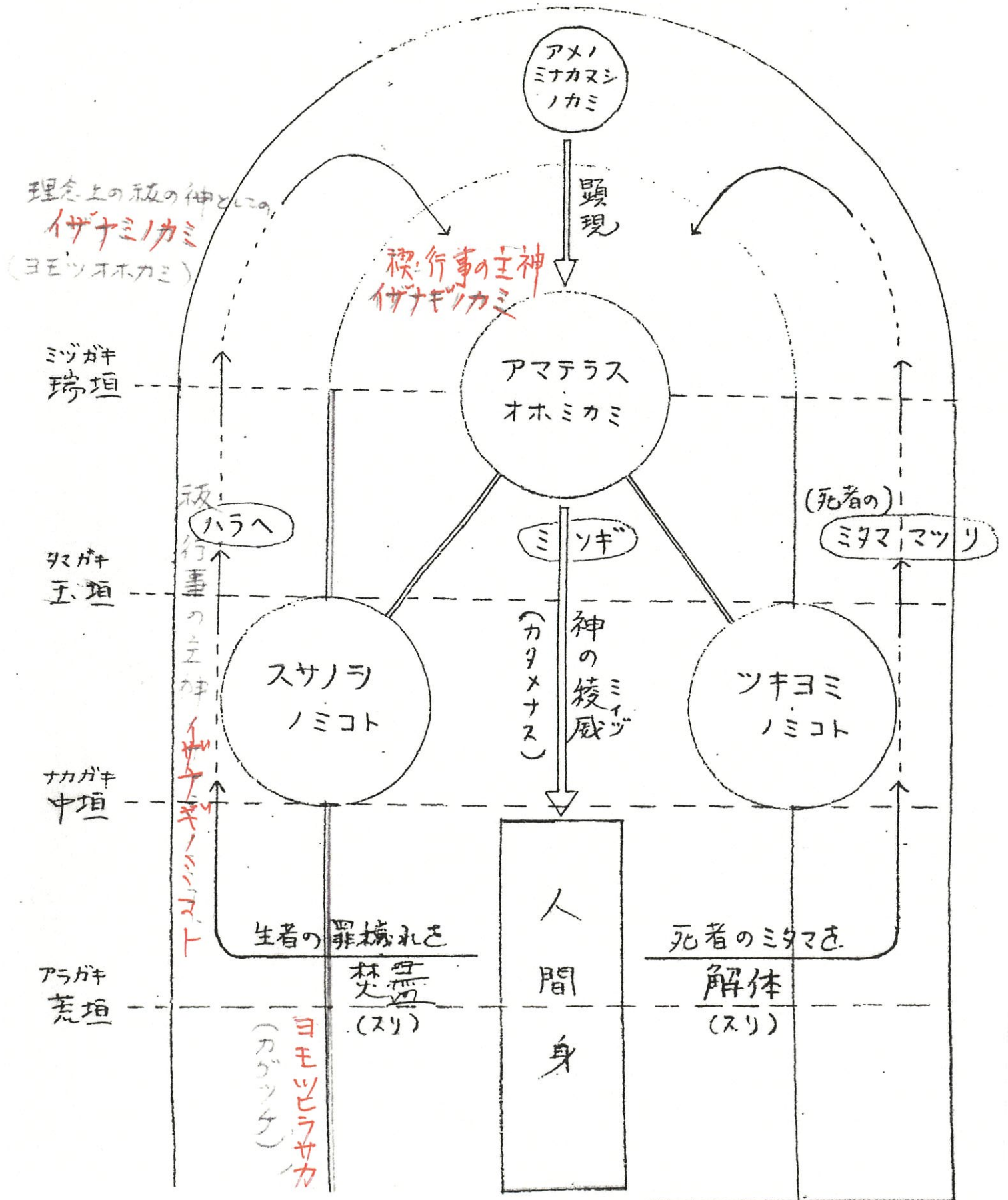
諸有禍事

祿遣

弗歧坐

明魂清魂

ミコトとしての基本形 (加筆版) この1.



DATE _____

⑤

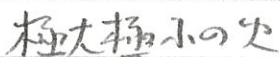
L t



知

最大最小の一

根本魂としての魂



→ 中心としての「火」

無宇宙

瑞垣

宇宙

中心
(直白)

稜
ミソキ

箇侏 (人間身)

垢穢

被
ハラヘ

無宇宙の側の
「火」を指して
「神」同士の火
と云ふ。

その作用力
としての「火」

尽天尽地の火

ヨモツクニ → ← サカツクニ → ← ヨモツクニ

尽天尽地の火、とは、

「火」は、現代語では「熱エネルギー」のイメージ。

必ずしも「炎」のように考える必要はない。

「熱エネルギー」は、光(赤外線など)のように、

すべての物体から独立して存在することもできるが、

その一方で、すべての物体の中には、必ず一定の「熱量」が
内在している。

(現実には「完全に、絶対温度零度の物質」というものは
存在しない。)

即ち、熱は、物体の内にも外にも遍在している。

よって、古典語では、この「熱」を「火」と象徴した上で、

「尽天尽地の火」などと称するのである。

第三 カッラノイツミ 香木の井泉

在る限り在らん限り一切合切を名づけて「大宇宙」と呼ぶ。唯一の存在で増減も消長も無い。然るに。人天万類がその中で生死変転出頭没頭し悲喜苦楽を演出して居る。その様を眺めて怪奇異霊の神魔殿だと言ふ。その神魔を「三神二霊」と名づけて人天万類生殺与奪の神権者である。その亦の名を「八種雷神」とも呼ぶは黄泉魔境に生りますすが為であり、亦の名を「黄泉津大神」と称へまつるは死生解説の秘鍵を掌握し給ふが故であり、亦の名を「神御産巢日御祖命」とも讃へまつるは万有の祖神だからなので生者から仰ぎ眺めての御名であり、亦の名を伊邪那美命と讃へまつるは万有産出の母胎にてましますが故である。その母胎を出で万有は生死遷転を繰返す。

けれども、その母胎だとは人間的に見て産出者だと思ふからなので半面観であるに過ぎない。従つてそれは事実ではない。さればとて事実でないわけでもない。ただ、人間身が万有として対立の存在であるがため総観する神智を失墜し完全に表現する神力を忘却して居るがために「宇宙観も万有観も明瞭しない」のである。

ああ。誰か掲ぐるものぞ「大宇大宙一円晃耀の零」。

在る時は有りところ見れ。行き行きて行きのはて無く行き迷ひたる。

行止進退唯是正。正誠正義神国築成。之是日本神道伝。

③ 三神とは 造化三神 即ち アメノミナカヌシノカミ、タカミムスヒノカミ、カミムスヒノカミ のこと。

二霊とは イザナギ・イザナミのこと。

出典は古事記の序文（底本43頁）

祓の意味

白玉の、眞玉勾玉、眞つぶさに、統一する御魂。天なるや、御中の神と、神知らすなる。

怪奇異霊の神魔殿。神魔本來非神非魔。古老は、之を教へて、「神魔同凡の天御鏡」なるぞと云はれたのである。過去を祓ひ、また過去を祓ひ、祓ひ祓ひても、人間身天降の時が判らず、天地の判別がつかず、自己本來何物であるかに徹し得ないとすれば、また更に、火之迦具土ホノカグツチの神徳を仰ぎて、幽界魔境に入るのである。

その幽界魔境とは、伊邪那美神の黄泉國なので、八種雷の荒び狂ひ、黄泉醜女の亂れ騒げる斯許米伎繁國シコメキシキクニである。此の國に入るものは、何如なる罪障宿業も焚き盡されて、速佐須良比咩ハヤサスラヒメの「ミマモリ」を得るから、此の身此のまま、此の土此のまま、此の時此のまま、一圓光明の妙相妙用を現するので、過去にあらざる將來にあらざる現在にあらざるの過今來を明らめ得るので、此の土此のまま「鏡の船」で、此の身此のまま「神の身」で、此の時此のまま「神の代」で、「○神・○魔」。是の如くに往き是の如くに來る。

此のやうな祓。その祓の結果を、延喜式の祝詞には、「高山の末短山の末より、さくなだりに、落ちたぎつ速川の瀬に坐す、瀬織都比咩と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ。此く持ち出で往なば、荒鹽の、鹽の八百道の、八鹽路の、潮の八百會に坐す、速開都比咩と云ふ神、持ち可吞みてむ。此く可吞みてば、氣吹戸に坐す、氣吹戸主と云ふ神、根の國、底の國に、氣吹放ちてむ。此く氣吹放ちてば、根の國、底の國に坐す、速佐須良比咩と云ふ神、持ち佐須良比失ひてむ」とて、四段の祓を教へ、「今日よりはじめて、天地の在りのことごと、罪と云ふ罪は有らじ」と云へるもの。上天下地唯見る稜威の赫灼たるのみである。

是の如くに往き、是の如くに來る、神魔同凡の火は、東西古典の傳燈で、何處何如なる民族も、古より今に到るまで、仰ぎ來り褒め讃へて止まざる唯一無二盡天盡地の○であるから、○神とも○魔とも呼ぶ。神ならざるの

神で、魔ならざるの魔で、「ヒ」と稱へまつるのほかはない。先師は、稜威會の宣言書に此う書いてある。「いかに其の信仰解釋實行の形式に於て文野高卑の別あればとて、一として邪道のみのもなく、魔法のみのもなく、均しく是れ根本大本體の天照なり、發顯なり。天照發顯としての一大活躍態なり。正邪一道、神魔一體、或は正となり、或は邪となり、或は魔、或は神たりつつあるに過ぎず。奚ぞ矧んや、其の正なるもの未必しも正ならず、其の邪なるもの未必しも邪ならず、魔、魔にあらず、神、神にあらずるものあるに於てをや」と。それから、教典捧讀の注意書には、「夫れ球體に於ける内容の中心は、唯一不二にして絶對無比に候ぞ。内容の中心より表はれたる輪廓の中心は、到る處に存在し居る者に候ぞ。内容に於ける中央の中心は、其の周圍十表に於ける群中心を一貫統一し居る有様を見よ。是れ宇宙の中心が延長して、宇宙と成り、其の宇宙には、分分微微に、中心のあることを證明したものである。中心より出づるものは中心なるからである」と記されてある。さうして、また別に、「零即一」とか、「無經無緯の高玉座」とか白されて、此の「ヒ」を稱へて居る。

此のやうな「ヒ」の結び結びたる人天萬類であるから、善惡美醜是非曲直と、まるで反對なことを思ひもすれば行ひもする。種種様様と數限りも無いことを、肯定もすれば否定もする。一見何とも複雑至極である。

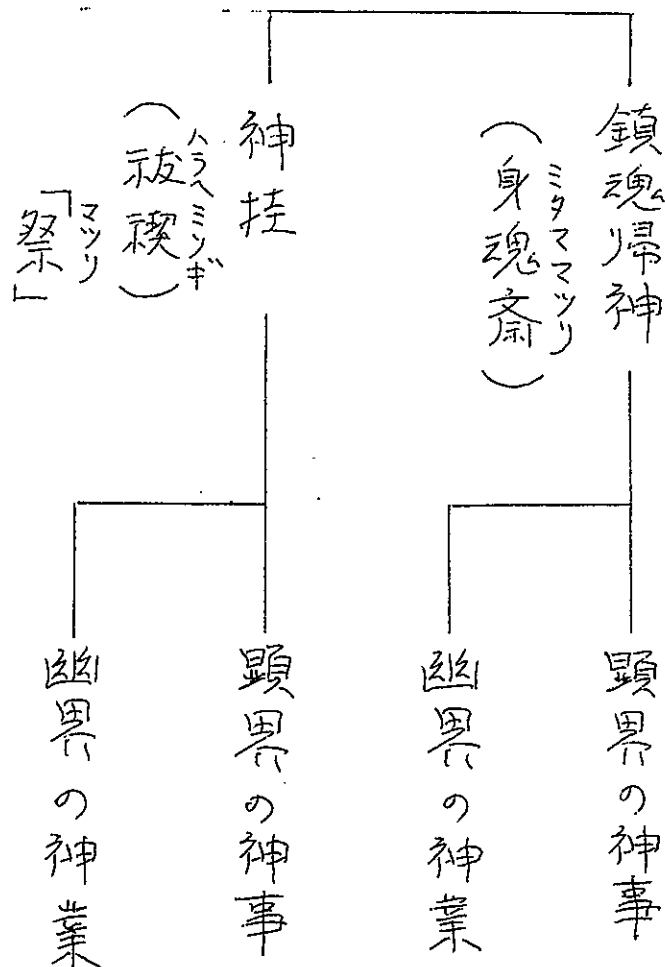
此のやうな中に、其のやうに生活しつつある人天萬類は、常に怒濤狂瀾の有様で、黒風暴雨の状態で、一日一時とても晏如たることを許されない。で、人人は間斷無く神音を稱へつつ、靜寧和平の神國樂園を築くやうに心掛けねばならぬ。

自己として築き成したる神國樂園は、何如に狭くとも小さくとも、國津神輪なので、天津神の詔せのままに、天沼矛の神事に隨順し得たので、聊なりとも神命に應へまつることを得たるもので、「産土神」と祀らるるのである。

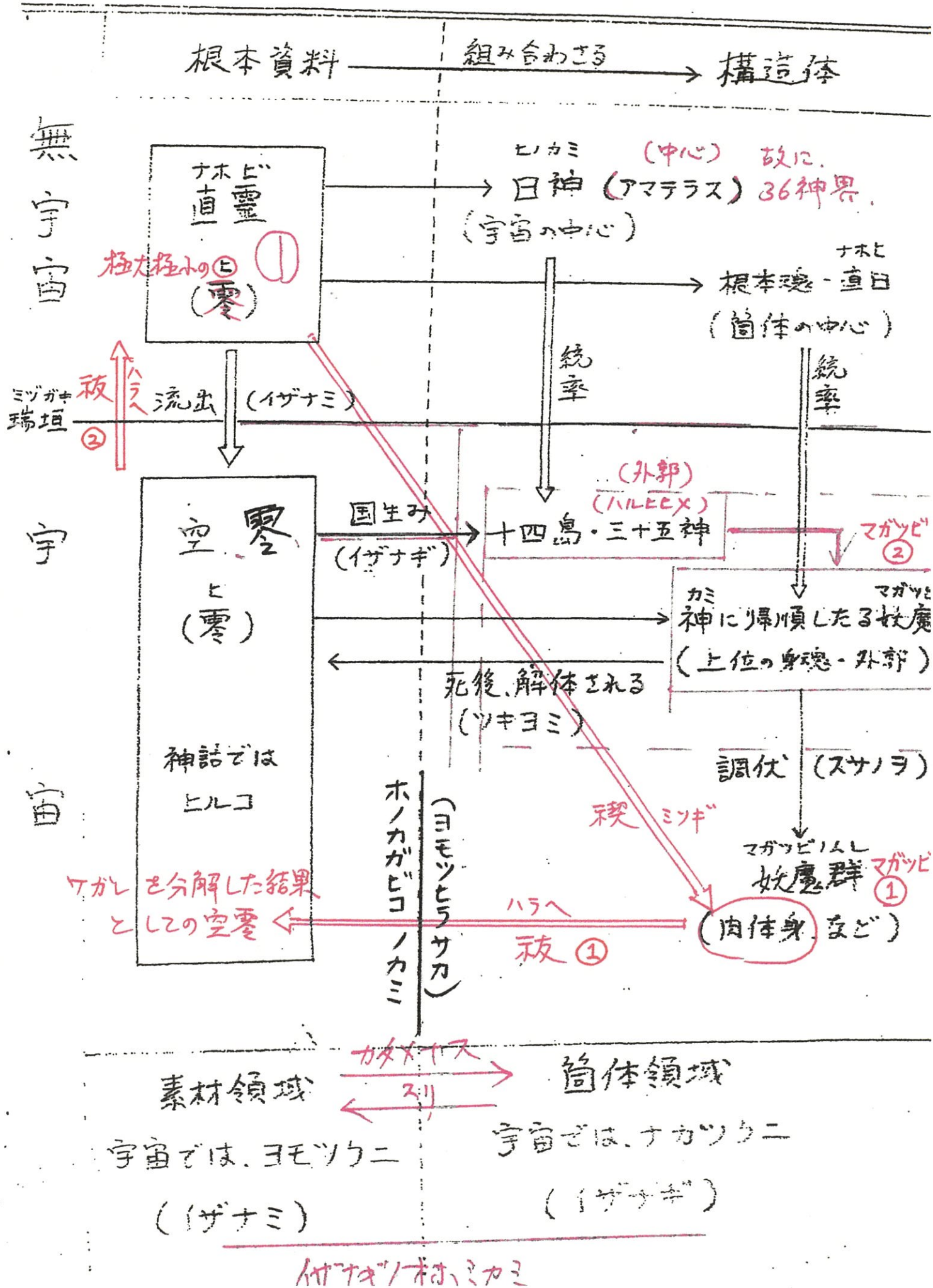
鎮魂帰神とは

身魂齋で、遊離の諸魂を招致奉齋して
 高天原を築き日と火と日若宮との宇宙
 を産出し長養して神國たる人類世界と
 成さんとし成すなる禍津日・八十禍津
 日・大禍津日・直靈・大直靈の神事で
 あり、神挂とは現身を調伏し濟度し救
 出して白玉身と成して自ら其の白玉身
 裡に白玉樓閣を築き、之れを磐境たる
 胎磐として鏡とし鏡の船として極大極
 小の比を招祭りて直日・大直日の人と
 成りて生誕するの祓禊で、天照大御
 神たる天御鏡尊誕生の神儀尊容で
 ある

日本民族の信仰



修理図式の機能図 直霊と空零



白玉の、眞玉勾玉、眞つぶさに、統一る御魂。天なるや、御中の神と、神知らすなる。

怪奇異靈の神魔殿。神魔本來非神非魔。古老は、之を教へて、「神魔同凡の天御鏡」なるぞと云はれたのである。過去を祓ひ、また過去を祓ひ、祓ひ祓ひても、人間身天降の時が判らず、天地の判別がつかず、自己本來何物であるかに徹し得ないとすれば、また更に、火之迦具土の神徳を仰ぎて、幽界魔境に入るのである。

その幽界魔境とは、伊邪那美神の黄泉國なので、八種雷の荒び狂ひ、黄泉醜女の亂れ騒げる斯許米伎繁國である。此の國に入るものは、何如なる罪障宿業も焚き盡されて、速佐須良比咩の「ミマモリ」を得るから、此の身此のまま、此の土此のまま、此の時此のまま、一圓光明の妙相妙用を現ずるので、過去にあらざる將來にあらざる現在にあらざるの過今來を明らかに得るので、此の土此のまま「鏡の船」で、此の身此のまま「神の身」で、此の時此のまま「神の代」で、「○神・○魔」。是の如くに往き是の如くに來る。

宇宙から無宇宙へと罪穢れを流すことの文字的な表現。

此のやうな祓。その祓の結果を、延喜式の祝詞には、「高山の末短山の末より、さくなだりに、落ちたぎつ速川の瀬に坐す、瀬織都比咩と云ふ神、大海の原に持ち出でなむ。此く持ち出で往なば、荒鹽の、鹽の八百道の、八鹽路の、潮の八百會に坐す、速開都比咩と云ふ神、持ち可吞みてむ。此く可吞みてば、氣吹戸に坐す、氣吹戸主と云ふ神、根の國、底の國に、氣吹放ちてむ。此く氣吹放ちてば、根の國、底の國に坐す、速佐須良比咩と云ふ神、持ち佐須良比失ひてむ」とて、四段の祓を教へ、「今日よりはじめて、天地の在りのことごと、罪と云ふ罪は有らじ」と云へるもの。上天下地唯見る稜威の赫灼たるのみである。

是の如くに往き、是の如くに來る、神魔同凡の火は、東西古典の傳燈で、何處何如なる民族も、古より今に到るまで、仰ぎ來り褒め讃へて止まざる唯一無二盡天盡地の○であるから、○神とも○魔とも呼ぶ。神ならざるのふは宇宙の側、海は無宇宙の側の象徴。水が山から川を流れて海へと流れ込むことを、罪が宇宙の側から無宇宙の側へと祓われることの「たとえ」として用いたのである。

神で、魔ならざるの魔で、「ヒ」と稱へまつるのほかはない。先師は、稜威會の宣言書に此う書いてある。「いかに其の信仰解釋實行の形式に於て文野高卑の別あればとて、一として邪道のみのもなく、魔法のみのもなく、均しく是れ根本大本體の天照なり、發顯なり。天照發顯としての一大活躍態なり。正邪一道、神魔一體、或は正となり、或は邪となり、或は魔、或は神たりつつあるに過ぎず。奚ぞ矧んや、其の正なるもの未必しも正ならず、其の邪なるもの未必しも邪ならず、魔、魔にあらず、神、神にあらずるものあるに於てをや」と。それから、教典捧讀の注意書には、「夫れ球體に於ける内容の中心は、唯一不二にして絶對無比に候ぞ。内容の中心より表はれたる輪廓の中心は、到る處に存在し居る者に候ぞ。内容に於ける中央の中心は、其の周圍十表に於ける群中心を一貫統一し居る有様を見よ。是れ宇宙の中心が延長して、宇宙と成り、其の宇宙には、分分微微に、中心のあることを證明したもとなる。中心より出づるものは中心なるからである」と記されてある。さうして、また別に、「零即一」とか、「無經無緯の高玉座」とか白されて、此の「ヒ」を稱へて居る。

此のやうな「ヒ」の結び結びたる人天萬類であるから、善惡美醜是非曲直と、まるで反對なことを思ひもすれば行ひもする。種種様様と數限りも無いことを、肯定もすれば否定もする。一見何とも複雑至極である。

此のやうな中に、其のやうに生活しつつある人天萬類は、常に怒濤狂瀾の有様で、黒風暴雨の状態で、一日一時とても晏如たることを許されない。で、人人は間斷無く神音を稱へつつ、靜寧和平の神國樂園を築くやうに心掛けねばならぬ。

自己として築き成したる神國樂園は、何如に狭くとも小さくとも、國津神輪なので、天津神の詔せのままに、天沼矛の神事に隨順し得たので、聊なりとも神命に應へまつることを得たるもので、「産土神」と祀らるるのである。

である。此の三音を重ねたのは陰陽不測之謂神なりとの義で神の本跡と妙用とは如是なりと言ふに等しい。「ヒ」とは火で日で一で無の有で零なる一である。故に「ハラヒ」とは万有と万有の発現する根本本跡との一跡観で「神の任運神ながら」と称へ神命に随順し奉るの義である。人も物も万有も其の罪尤垢穢の罪尤垢穢であることを畏み敬む時は常にもがもに神の神事神の御恵神言霊を拝み本来本有の「神象」を現し神業を建て得るものであるから「敬神」を人間行為の羅針盤にせよとの垂示である。

「如此失^{氏婆}」「人天万類尽天尽地今日以降罪止云布罪波不在止祓却給事乃尊乎恐美惶美氏奉拝奉感謝奉祭止奉白留」と伝へた末文は必竟前文の括りで更に約めては「敬神」の一語に尽くるのである。

「天照大御神・神漏岐命・神漏美命・建速須佐之男命止大御名波奉称^氏天祖天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊」

大宇宙の真を忘れて牆壁境界の間に踟躕せる人天万類も神の日の導くままに神の言霊を称へまつれば其処に「日像鏡」を拝し「カミ」の中に我が真象を認めて天皇国の大御宝たる実を現し来るのである。斯くて此の国をば「天照大御神の稜威」なりと畏み其の御活きを仰ぎては神漏岐命神漏美命建速須佐之男命と称へまつり其の御象は天讓日天狭霧国禪日国狭霧と称へらるる天祖にてまします。天祖は日神にして二つの零の産靈たまへる身なれば隱身天之御中主神の「カミナガラ」である。

阿那「畏」とも畏き極みなりと拝みまつり祭りまつる。

此の前文と末文とを付けた「祓言」の全文は次ぎの如くである。

「参集^{マエリツドヘル}留^{ヒトビト}人人。国土山河。草木。空行雲。地潜虫。天地乃在乃尽。今日乃祓乃御祭。各自各自我。^{アヤマテオカシケム}還^{クサグサノトガトイフツガ}犯^{ツミトイフツミ}計^{アカトケガレトヲ}牟^{ハラヘヤラヘキヨメタマフ}。雑^{カミミノカミワザ}雜^{カミコトタマヲ}乃^{ツツシミカシコミヲロガミマセト}尤^ハ云^ハ尤^ハ。罪^ハ云^ハ罪^ハ乃^ハ。垢^ハ斗^ハ穢^ハ斗^ハ乎^ハ。祓^ハ却^ハ閑^ハ清^ハ給^ハ布^ハ。神^ハ乃^ハ御^ハ恵^ハ。神^ハ言^ハ靈^ハ乎^ハ。敬^ハ美^ハ畏^ハ美^ハ拜^ハ美^ハ坐^ハ勢^ハ斗^ハ

マラス
白須。

高天原爾神留坐。皇親。神漏岐。神漏美乃命以互。八百萬神等乎。神集集賜比。神議議賜比氏。

我皇御孫之命波。豐葦原乃水穗之國乎。安國斗平久知所食斗。事依志奉伎。

如此依志奉志國中爾。荒振神乎婆。神問志問志賜比。神掃掃賜比氏。語問志磐根樹立。草之垣葉乎毛語止氏。

天之磐座從。天之八重雲乎。伊頭乃千別爾千別氏。天降依志奉志伎。

如此依志奉志四方之國中登。大倭日高見之國乎。安國斗定奉氏。下津磐根爾宮柱太敷立。高天原爾千木高知氏。

皇御孫乃命乃美頭乃御舍仕奉氏。天之御蔭日之御蔭斗隱坐氏。安國斗平久所知食武。

如此知食須國中爾成出武。天之益人等我。過犯計牟雜雜罪事波。天津罪牟。畔放。溝埋。樋放。頻時。串刺。

生剝。逆剝。屎戶。許許太久乃罪乎。天津罪斗法別計氏。國津罪斗波。生膚斷。死膚斷。白人。胡久美。川入。

火燒。己母犯罪。己子犯罪。母与子犯罪。子与母犯罪。畜犯罪。昆虫乃災。高津神乃災。高津鳥乃災。

如此出婆。天津宮事以氏。天津金木乎。本打切末行斷氏。千座置座爾置足波志氏。天津菅曾乎。本刈斷末刈切。

八針爾取辟氏。天津祝詞乃太祝詞事乎宣礼。

如此乃良婆。天津神波。天磐門乎押坡氏。天之八重雲乎。伊頭乃千別爾千別氏所聞食武。國津神波。高山之末。

短山之末爾上坐氏。高山之伊穗理。短山之伊穗理乎撥別氏所聞食武。

如此所聞食氏婆。皇御孫之命乃朝廷乎始氏。天下四方國爾波。罪止云布罪波不在止。科戸之風乃。天之八重雲。

吹放事之如久。朝之御霧夕之御霧乎。朝風夕風乃吹掃事之如久。大津辺爾居大船乎。舳解放舳解放氏。大海原。

兩押放事之如久。彼方之繁木本乎。燒鎌乃敏鎌以氏。打掃事之如久。遺罪波不在止。祓給比清給事乎。高山之末

短山之末与里。佐久那太理爾。落多岐都速川能瀬坐須。瀬織津比咩止云神。大海原爾持出奈武。

如此持出往婆。荒塩之塩乃八百道乃。八塩道乃塩乃八百会爾生須速開都比咩止云神。持可吞氏卒。

如此可吞氏婆。氣吹戸坐須。氣吹戸主止云神。根国底国爾氣吹放氏卒。

如此氣吹放氏婆。根国底国爾坐須。速佐須良比咩登云神。持佐須良比失氏卒。

如此失氏婆。天皇我朝廷爾仕奉留。官官人等乎始氏。人天万類尽天尽地。今日以降。罪止云布罪波不在止。

祓却給事乃尊乎。恐美惶美氏。奉。拜。奉感謝。奉祭止奉白留。

天照大御神。神漏岐命。神漏美命。建速須佐之男命止。大御名波奉称氏。天祖天讓日天狹霧国禪日国狹霧

尊。畏。」

「畏」と結んであるのは「火上の群生」なりとの義で「敬神」と称するに等しく「ツツシミ・ツツシム」ものである。「畏」は田一以の合成でその一は天地を判つもので以は火で田は箇躰で宇宙である。

如此にして「祓」が行はれ神界樂土が現成する。その様は

「科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如久」であり

「朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久」であり

「大津辺爾居大船乎舳解放鱸解放氏大海原爾押放事之如久」であり

「彼方之繁木本乎燒鎌乃敏鎌以氏打掃事之如久」であつて

「遺罪波」無い。まことに疾風迅雷よりも快速に「天下四方国」の「罪止云布罪」は失ひ去られるのである。

その速なることは蓋「ナムアミダブツ」一語の称名に一切衆生の罪障が消滅するものと等しきものである。然うしてそれは、

「天津祝詞乃太祝詞事乎宣」る結果である。

如此結果を齎す「天津祝詞乃太祝祠事」とは抑何であるか。それを形象であらはせば、

「本打切末打断_氏千座置座_爾置足_{波志}」たる「天津金木」であり「本刈断末刈切_氏八針_爾取辟」たる「天津菅曾」である。

仏徒に云はせるならば金胎両部乃至仏界の実相たる曼陀羅でもあり詞としてならば「南無阿弥陀仏」の六字の番号でもあり真言でもある。なほ太古中央亜細亞に起り現在も基督教徒の行ずる十字架もその一つの神象である。がさて奈何なればそれが垢穢を掃ひ浄土を築き苦悩を去り楽土と成すのか。それは既に前に述べた如く「零境」に徹するからである。「零」とは「無」である。「無」なるものが「有る」のである。之を別の詞では「極」と呼ぶ。一切を脱却するもので脱却したるもので人間身の認め得るものを仮借しては「火」である。地獄の火で餓鬼道の火で畜生の火で修羅道の火で三千大千世界焚尽の火である。

此の「火」を忘れざる人は「畏れ無く」此の「火」を畏るる国は「憂ひ無し」。此の「火」を掲げて一切衆生を靖寧和平ならしむるは畏くも日本天皇の神伝にして「大祓」の秘儀なりと拝承しまつるのである。

一二三四五六七八九十と神楽歌神の御垣の手火ぞ畏き。

嗚呼是レ神の御恵みなり皇親神漏岐神漏美の命なり。

阿知米。

阿知米。

阿宇袁衣耶。宇。

之は是「施無畏者」。

此の「施無畏者」は速佐須良比咩神であり氣吹戸主神であり速開都比咩神であり瀬織津比咩神である。

此の四神の御活きの様は

「高山之末短山之末与里佐久那太理爾落多岐都速川能瀬」の速きが如く「瀬織津比咩」の綾目奇しく

「荒塩之塩乃八百道乃八塩道乃塩乃八百会」の勢すさまじきが如く「速開都比咩」の呑み尽せばその神の身の

そのままにその禍津毘のそのままに「氣吹戸主」の神性^{カンサカオコ}発して三惡道の大魔王と変じ「速佐須良比咩」何処をそ

れとも知らに白日晃耀一田の妙相と化するのである。

之を「ヒ」と称へ「零」と呼び「一」と算へ「〇」と描く。

まことに是れ上天下地過今来如是の妙象妙音妙数である。

阿那畏。

登り来て道忘れけり夏の山。

降り行く谷の底道温泉^ユの香^{カラリ}。

泉声は潺湲として白玉光底に雄走る。

どうやら是レで概説し得たようである。

結局。「大祓」とは古事記等に伝へられた「伊邪那岐大御神の御身之禊」の御垂示を人の世にて神習ふもので

「敬神」であることは、次ぎの「祓言」に依つて知ることが出来る。

「祓言」
ハラヘコトバ

マキリツドヘルヒトビト
参集^{マキリツドヘルヒトビト}閑留^{クニツチャマカハ}人人。国土山河。草木。空行雲毛。地潜虫毛。天地乃在乃尽。今日乃祓乃御祭爾。各自各自我。
アヤマチオカシケム
過犯^{アヤマチオカシケム}計牟。雑^{クサグサ}乃尤云尤。罪云罪乃。垢斗穢斗乎。祓却^{ハラヘヤラヘキヨメタマフ}閑清給布。神乃御惠。神言靈乎。敬美畏美^{ツツシミカシコミフロガミマセ}拜美坐勢^セ斗^ト白須^{マラス}。

伊宇袁衣耶。

宇斗乃宮。宮斯呂築成住我乎。神乃我叙斗。神知^{テルニ}邇邇^{テリタル}。神乃神輪叙^{テリタル}晃耀赫灼矣。

阿知米。

阿知米。

阿宇袁衣耶。宇。宇。宇。宇斗。宇斗。宇。

カク
如此久失^{ウシナヒテバ}氏婆。人天万類尽天^{アメツチノアリノコトゴト}地。今日以降。罪止云布罪波不在止。祓却給事乃尊乎。恐美惶美^{カシコミカシコミテ}旦。奉^{ヲロガ}

ミマツリ
拜。奉感^{キヤマヒマツリ}謝。奉祭止奉白留。天照大御神・神漏岐命・神漏美命・建速須佐之男命止。大御名波奉称^{オホミナハクタヘマツリテ}旦。天

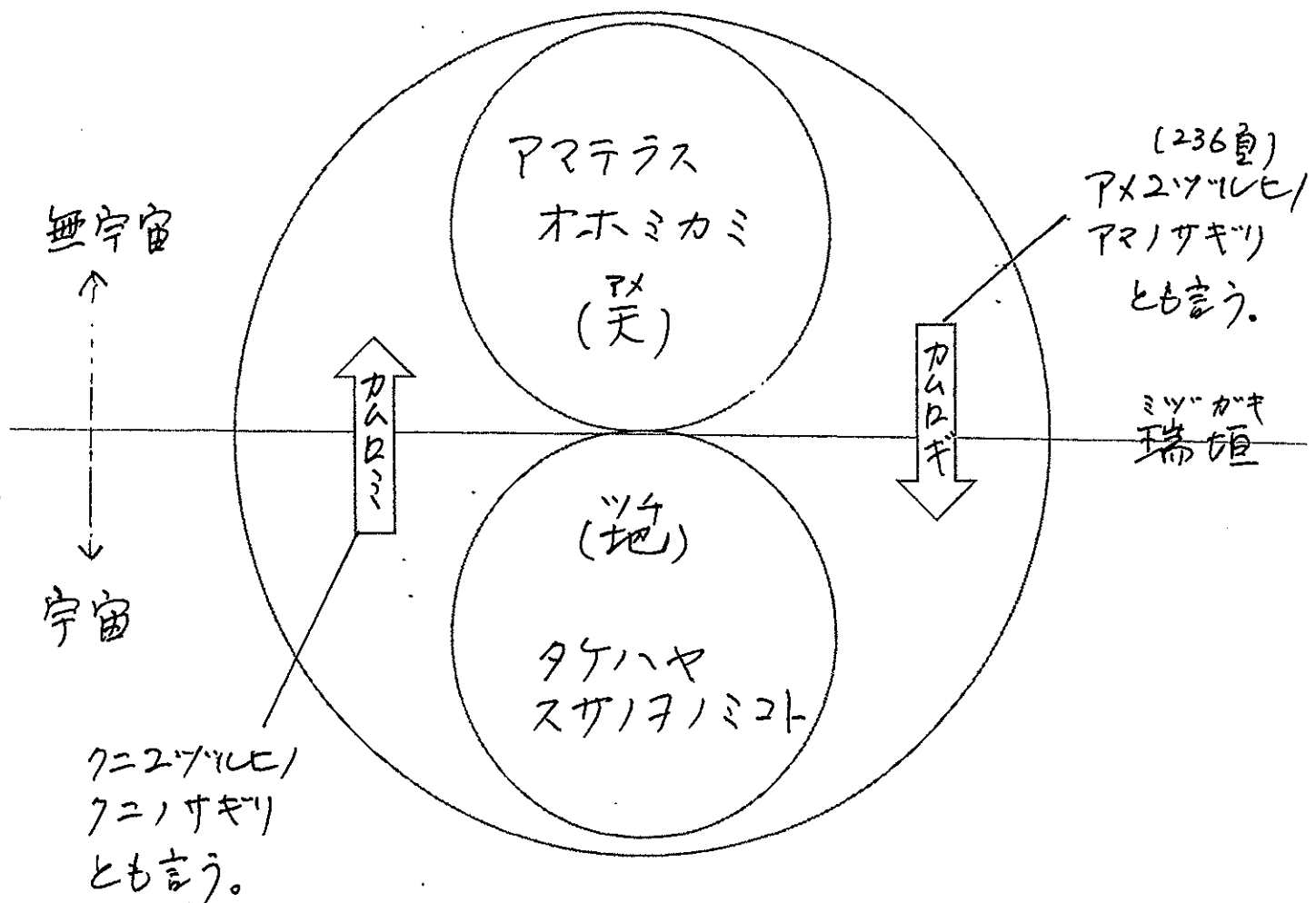
ミオヤアメニツルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト
祖天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊。畏。

③

②

220?

①



全部アマツカミ (ウツシオミ) のヒノカミ

アマテラスの吹きはなつ イブキノサギリ

→アメユヅルヒノ アマノサギリ

スサノヲの吹きはなつ イブキノサギリ

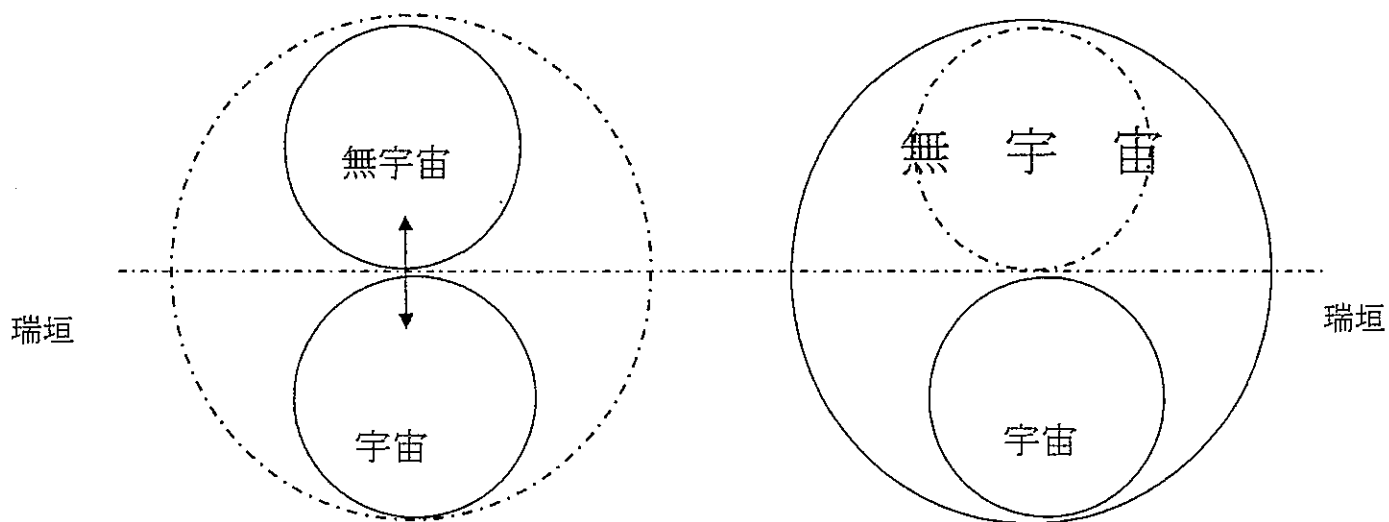
→クニユヅルヒノ クニノサギリ

⇒合せて天祖の神名となす

天祖天譲日天狭霧国譲禅日国狭霧尊

アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト

(1789) 無宇宙



宇宙の側からの
視点による理解

二項対立あり

スサノヲノミコトの立場

ハラへの境地

無宇宙の側からの
視点による理解

二項対立なし

アマテラスオホミカミの立場

ミソギの境地

り、神言を誦し、神樂を奏し、神身を築き成して、神光を發揮したので、之は、天宇受賣の禊と稱へまつるべく、高天原と葦原中國との開闢を教へられたのである。

天地開闢而。神聖生其中焉。日毎日毎、日の大御神生れますと。

鄙ウナキの髻髪が、歌をかしかも。萬代に、我は變らじ。我が友の、

世世の玉の緒、結び結べば。

結び置きし、門の若柳、繁り合ひ、枝分かずこそ、色増さりけれ。

神代紀としての古典は、禊の行事を待つて、初めて釋くことが出来る。古典の上に、日の神御生誕の記載が、幾回となく繰り返されてあることもまた、禊の教へを待たねば分らぬであらう。

第十三、「櫛名田比賣」

「速須佐之男命は、神夜良比夜良波衣カムヤラヒヤラハエて、出雲國の肥の河上の鳥髪と云ふ地に降トコロられた」とある「夜良比」は、「遣らひ」「却らひ」等と當ててあるやうに、すっかりと全部を棄てるので、「瀬織津比咩神・速開都比咩神・氣吹戸主神・速佐須良比咩神。持ち佐須良比失ふ」もので、完全に祓得た暁である。

之を、別の方面から云へば、汚れた着物の洗濯が出来上つたのであり、塵塚の塵芥が焼き盡されたのであつて、「遣る罪は在らじ」と、根の國底の國にて失ひ果てたのである。尙、言ひ換へると、地獄の釜の底を打ち摧いた暁である。

すると、其處には、肥川ヒノカワが流れ、日神ヒノカミの伊呂勢イロセの命としての本來の面目に立ち歸つた建速須佐之男命の立たせ給ふのである。その「素戔鳴尊立ちどころに、奇稻田姫に化りて、湯津爪櫛ツクを爲りて、髻ミミツラに挿し給ふ」とある

日本紀の本文の如く、高天原に祓却らへ給へる御身は、肥川に禊し、鎮魂し給ひて、「足名椎・手名椎・櫛名田比賣・八俣遠呂智・都牟刈之太刀・八嶋士奴美神」を吹き成し給ふもので、建速須佐之男命の幸魂奇魂の神をば、「クシイナダヒメ」と稱へまつることが、祓禊の神儀を仰ぎまつりて、初めて知らるるのである。

天離る鄙にはあれど、三重の子が着る衣手の、五色のその中にして、

碧濃き大綿津見の、根の國の底ひ潛りて、

紫の大山祇の、足曳の山の尾分けて、

涯も無く限りも知らに、人の子の伊往き來にけれ。

並び立つ神の鳥居か、二柱御祖の神の、天なるや天浮橋。

久方の天沼矛を、

久士布留の天逆矛、

さかしまに手挿み立てる、

眞具に執りてぞ立てる。

その神のあやしきすがた、

その人のくすしき光、

白妙の衣の袖を、

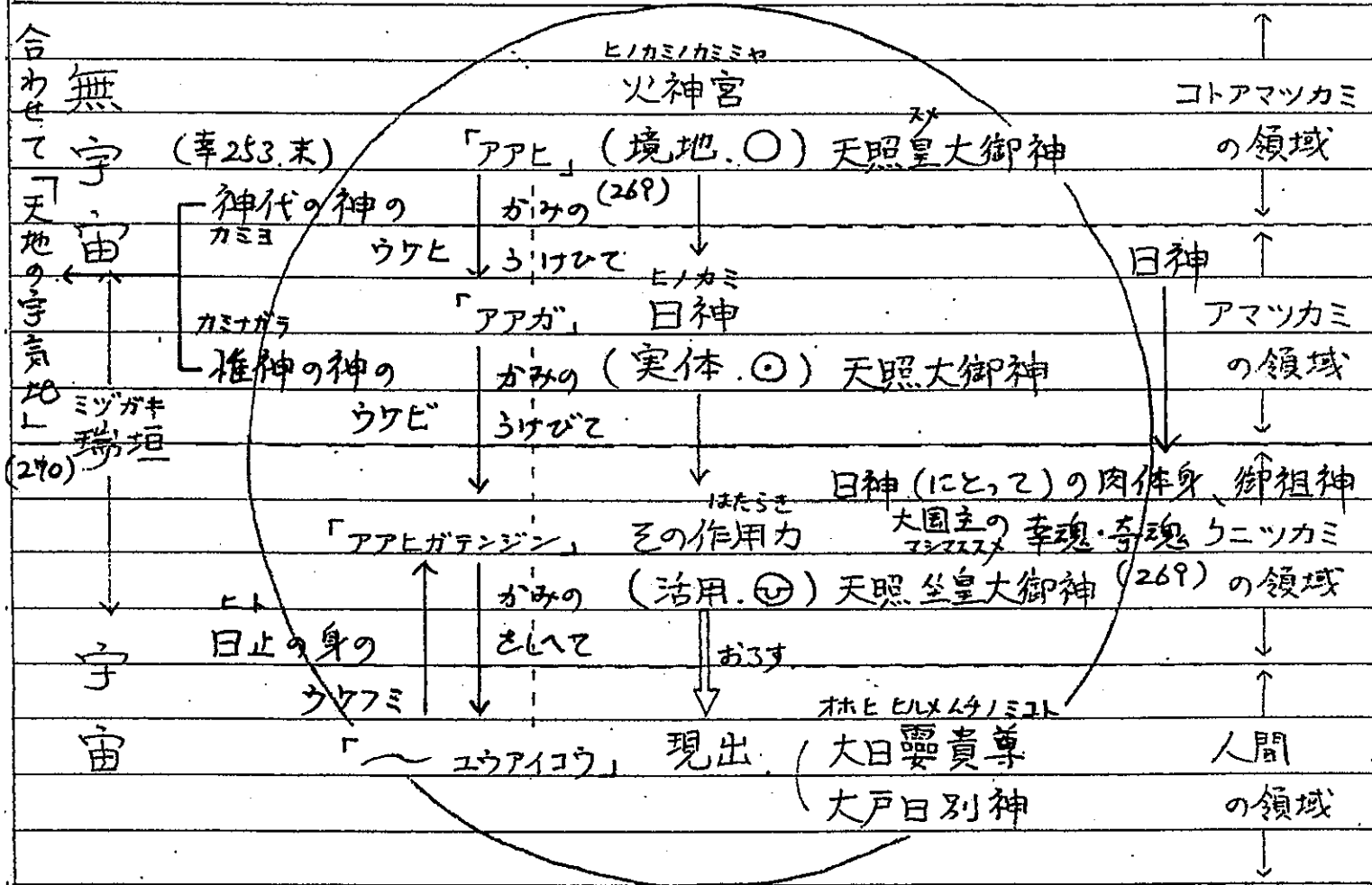
八重たたむ裳裾の褶を、

から幾の綾もや有ると、

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
日神の作用力は 最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。
ヒノカミ はたさき



第五節

「阿」を磐境なり「磐境」を阿なりと云ふ。人或は怪しまんか。「阿」とは、經も無く緯も無きの零境なるに、「磐境」とは、堅固に築き成されたる境地にして、君が御楯にして、大御寶にして、天照大御神の治ろしめす高天原なれば、甚相異れるにあらずやと。

然り、當に此の疑ひ起るなるべし。此の故に、古典には、三不可分の神勅を傳へ給はく、「高皇產靈尊は、天津神籬と天津磐境とを樹てて、皇孫命の御爲に齋ひまつるなれば、汝等は、此の神事に神習ひて、必、大日本天皇國を大日本天皇國たらしむべきなりと勅したまひ」「天照大御神は、天忍穗耳命に御鏡を授け給ひ」「また、高天原の齋庭の穗を人の世に降し給へり」と。

又云、「高皇產靈尊は、マユカフスマを瓊瓊杵尊に被⁺せ給ふなり」と。

マユカフスマを翻譯すれば、・ー〇にして、天御鏡にして、鏡の船にして、ヒフミにして、宇宙成壞の事實にして眞理にして事理不二の神祕なり。之を換言すれば、神界と魔境と一几に在るものにして、人天萬類相互出入往返の事理にして、「高天原と葦原中國と相距ることの遠からざる」ものにして、天孫降臨と教へ來りし神國築成の祕事なるなり。

然り。祕事なるが故に、人は之を知らざるなり。人身にして、人身の生滅起伏を知らず。之を知らずと雖、生滅起伏を免るるものにはあらず。生れ生れて、生の來るところを知らず、死に死にて、死の往くところを知らず。

2019.11.26.

幸164頁 末2行.

人々は人間身の生滅起伏について、よく理解はしていない。

生まれる前にどこから来たのか？ 死んだ後にどこへ行くのか？

自分自身のことなのに何も判^{わか}っていない。

だが、知らぬままで済まされるはずはないので、誰かから教^{わか}えてもらわなければならない。（以下、秘稿の内容）

これを人間に教えるのが「生死運流」の事理であり、それが即ち、アメノミナカヌシノカミの音義である。

アメノミナカヌシノカミとは大宇宙の大中心であり、即ち、

直^{ナホヒ}日のような中心たちにとっての中心である。それ故、

直日がさまざまな種子たちを正しく養い育てるためには、

大中心の神徳を仰がざるを得ない。その事実を表現した

ミウタが「あきまめはへ」であり、より具体的に言えば、

人間身は高木神の神徳によって、大中心たるアメノミナカヌシノカミの神徳を仰ぐのである。

天鹿兒弓

多田山公秘稿

世上所傳、日文(ひふみ)なるものあり。

① 徳川氏執政時、平田篤胤、仙童寅吉より聞知、記録に止めて印行せるものは左の如し。

ヒフミヨイムナヤコトモチロ
比布美與以牟奈耶古登毛智呂
ラネシキルユ井ツワヌソヲタハ
良襦志伎流由韋都和奴曾袁哆波
クメカウオエニサリヘテノマス
玖米迦汗游良爾佐理閑弓乃麻須
アセエホレケ
阿世惠保禮氣。

② 之れを一音一義の言靈となす。
③ 佛者所云の六道輪廻との意なれば、因より区切無く、首尾も無きなり。
④ 迷ひ又迷ひ、苦しみ又苦しみ、墮落又墮落、死又死、分散又分

散、底止するところ無きを教へたる言靈にして、一言主神(ヒトコトヌシノカミ)の司りましますところなり。

一言主神と称へまつるは葛城野神(かつらぎのかみ)の又名なれば太玉尊(ふとたまのみこと)の神徳を讃美したる日本民族傳承の言靈にして、稱へまつれる御名なり。

日文とは『ひふみ』にして、

日經身なると共に火踏なり。

⑤ 轉轆還流の意なるなり。

神恩昭昭

神威赫灼

神徳穆穆

日月運行而攸忽俄然

轉迷開悟之言靈。

之是一音響。

之是一圓相。

⑦ 如是言靈とは、

ヒフミヨイムナヤコノタリ

ヤモモチチミテリ。

是れなり。

之れ一音に一義を有すると共に二十一音にて復一義なるもの最大にして最小の音なり。

日本民族傳承の神傳に『オトタナバタ』とは、此は神言(かみのことば)を讃美したるなり。佛者所云の妙音觀世音なり。梵音なり。

其の人を教へんが爲に形容して海潮音と呼ぶところ、即神音なるなり。

故に、古來絶えて之れを解説せず、唯一尊念奉稱したる而耳。

金鈴一振

梵鐘一打

火光一閃

忽然體得之是一音。

ひは日なり。火なり。靈なり。

魂なり。一なり。極大なり

極小なり。

ふは経なり。經過なり。時置師

(ときおかし)なり。變遷

なり。轉化なり。死滅なり。

二なり。微細なり。小宇宙

なり。

みは身なり。實なり。見なり。

三なり。參進なり。退くこ

と無きなり。分身なり。箇

體なり。子女産出なり。

よは代なり。世なり。重なり。
隔離なり。四なり。死なり。
終息なり。
いは進なり。出なり。五なり。
正なり。
むは結なり。群なり。集なり。
六なり。結實なり。結實分
布蕃息傳播なり。
なは風なり。和なり。平穩靜寂
なり。七なり。塩土（しほ
つち）なり。人間身なり。
やば彌なり。進なり。鋭なり。
矢なり。八なり。分割なり。
咲なり。笑なり。和樂なる
と共に死滅なり。生死一如
なり。
こは固なり。凝なり。結晶なり。
兒なり。
こは轉輾變遷離散なり。
のは野なり。平なり。原なり。
和樂なり。女徳なり。
たは高なり。足なり。顯なり。
現なり。
りは分散なり。殺害なり。征伐
なり。
やは足り満ちて産出分身する力
なり。

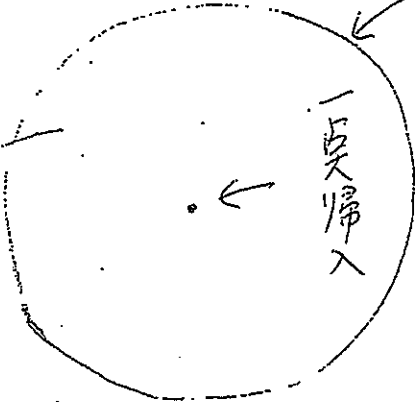
もは思なり。慕なり。
もは思慕戀愛なり。
ちは血なり。散なり。分散なり。
ちは千にして無際無涯なり。
みは身にして道なり。
ては照なり。赫灼なり。
りは分身なり。子女なり。箇體
なり。小宇宙なり。
之れを各音の表現する意義と
なす。
而して、二十一全音は宇宙構
成の眞理を表示せる 天御鏡尊
（あまのみかがみのみこと）の
神徳にして乾坤一音の神言靈な
ると共に魔類を調伏濟度救出し
て、神界樂土に誘導摂入するの
神音なり。
示（しん）音なり。
 音なり。
日なり。
日神（ひのかみ）なり。
一音響にして又一圓相なり。
三重體（さんぢうのたい）な
り。
二重用（にぢうのよう）なり。
四重示（しぢうのしん）なり。
五重示（ごぢうのしん）なり。

七重  （しち
ぢうのしん）なり。
九重  （くぢ
うのしん）なり。
是れを窮數となし又満數とな
す。
一二三四五六七八九十百千萬
となす。
阿阿比賀天吽爾吽由宇阿伊固
宇なるなり。
まするのかがみ
魔澄鏡
以上

昭和九年二月二十二日

みたままのつりにあはする
 アマノミタカヌシノ
 オホミカミの
 先祖諸魂の
 慰霊のやり方

アマノミタカヌシノオホミカミ



この丸と矢は、
 大宇宙と上ははその中心を示し、一上入を出でて一上入
 に入るを敬わすております。

沼田氏前生の父母祖の宗の魂
 縁由諸有諸魂

④ 沼田氏前生の父母祖の宗の魂

⑤ 沼田氏前生の父母祖の宗の魂

縁由諸有諸魂

⑥ 沼田氏前生の父母祖の宗の魂

奥の

旨得解脱

阿彌陀佛一上入明々環々

(毎月のみそぎの時)

西の海大海岸の沖の瀬は
 汚れを祓う穢の忌液

(夏越しの祓は)

水無月の夏越しの祓一する人
 は千年の命延ぶと云う

名前の合字方は名あを言いて
 頂くのがあを言いてあります。

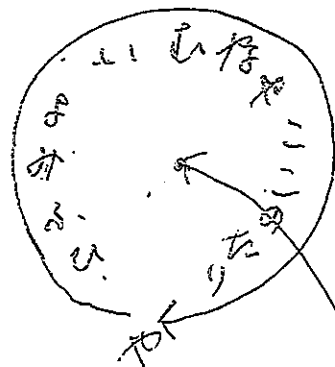
記入する派

心身を清澄にして

筆に受火

二十一秘言をとらへつつ

ひるみよいむたやここのたりや
 ももちちかこり



紙に受火と紙を返して
 目の上にかかけ、一と
 息を吐きつけ、諸魂を
 一上入帰入させる。

ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章 終

第八章 少彦の協力^{マガツビノカミ}

「一にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理観で宇宙観で、また、人身観だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の緒を結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。

日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂^{タカミムスビ}の神の御子^{ミコ}に暴悪で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遲神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとすれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を翻して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を

毒害和平ならしむることは、所謂「毒を以つて毒を制する」のではなく、「毒を交じて薬と為す」ものである。それならば、どうして「毒が薬に変わる」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のまま分量と時間と空間とに適應させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用に依つて醜を美に悪を善に邪を正に轉換させるので、用の方とか使ひ場所とか使用の時とかに關はるのではない。「神音を称^{タタ}へ神象を画^エき神数を算^スむ」。すると、禍津^{マガツビ}昆^ヒと呼ぶところの醜惡邪曲が極底最下の火と化して根堅^{ネノカサス}洲^{クニ}国^ニを築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に称へる秘詞とは神音であり、行事中に画^{カケ}するは神象であり、斎部の算^スむは神数である。さうしてその全部が行はれれば、瀬織津比咩・速開都比咩・氣吹戸主・遠佐須良比咩の神座^{カミクラ}が成立する。それは則、日若宮^{ヒノワカミヤ}で、日隅宮^{ヒスミノミヤ}で、である。

かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらざるの点線面なればとて之を画いて「ヒ」となし之れを算^スんで「イ」となし之れを詠^{ウタ}ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出没浮沈三惡道。願望一夕冢間煙。

立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

アメノミナカヌシノカミの「
 ア」は八平手の義にて開闢、
 メ」は女・陰・凹・坤・卑・
 ・二・平野沃土、「ノ」とは野
 で産出の胎、「ミ」は身・實・
 稔・充塞、「ナ」は菜・魚・肴
 で資料、「カ」は晃耀赫灼、「
 ヌ」は温・盜の「ヌ」と同義、
 「シ」とは否で否定で、他の存
 在を認めざるもので、「ノ」は
 沃地淨土・火國・皇土・四十日
 ・曠野、「カ」は正誠正義、「
 ミ」は邪惡醜陋なるものにて泥
 土の義にして、十一全音の義は
 生死遷流にして、人身の来ると
 ころと、往くところと、来往し
 つつ、来往無きところとを教へ
 られたるなり。

「無常」の境地

ここで言う「養ひ育てる」は、直日が身魂を帰順させること
 即ち、アメノミナカヌシノカミの神徳や神言靈によつてこそ、
 人間は神の人、直日の人、となることができるのである。

あきさめはけふはなふりそわ
 がせこがみのりだからんつかの
 はれまぞ。

とは、種子を完全に養ひ育つ
 るに神徳を仰がざるべからずと
 の神言靈なり。

アメノミナカヌシノカミの神
 言靈にして、其の神徳なれば、
 火神事にして、高皇產靈神の別
 名にして高木神の神挂なり。

あちめあちめ。
 ああひがてんじんゆうあいこ

う。

以上

134

昭和十一年十月二十日

無常の世は、生死遷流の大前相。

「無常」の境地は、生死遷流の大前相。

旋廻統一

發展して御中主太神に還元す。故に主觀客觀俱に出發點あり歸入點あり、出發歸入不二一體となり居るのが祖神の垂示である。この中心分派根本末梢出發歸入發展還元、不二一體を綜合したるものが天御中主太神に在坐するものである。

超絶的 (四) 本體神と本體の本體神と大本體神と總體と一と稱す。

且つその宇宙萬有の出發活動歸入する状態は、客觀的に説明すれば、光である、稜威である。主觀的に説明すれば、その光りや稜威の主觀が生産靈神、足産靈神、玉留産靈神である。それで高皇産靈神、神皇産靈神は生産靈、玉留産靈の統一結晶體が高皇産靈神、神皇産靈神である。

産靈神、足産靈神、玉留産靈神の三神より成立し居ると共に、生産靈神、足産靈神、玉留産靈神は天御中主太神より分泌分出し居るのである。故に高皇産靈神、神産靈神は宇宙萬有の本體にして、生産

靈神、足産靈神、玉留産靈神は宇宙萬有の本體の本體神であると共に、御中主太神は宇宙萬有の本體の本體の大本體神となり居るものである。

(四) 天御中主太神と三産靈神と高皇産靈神
(五) 神皇産靈神

天御中主太神

三産靈神

極大の極小の

そこで、話を元に返して、此の零であるが、人間的には、何も無いと思はれるのだが、實は、大宇宙に遍滿して居る。遍滿して居るとは、大宇宙即零だと云ふことで、之れを、ナクテアルモノダ實 在 と呼ぶ。此の無くて有るものが、「生産靈・足産靈・玉留産靈」として、ムスビ ムスビ産靈産魂たる萬類萬物である。萬類萬物を、萬類萬物は、慥に在ると認めて、各自各自に、之れを執持して居る。

あなあはれ。

アリテアルモノ存在で ナクテアルモノ實在で、ヒカリミチタル◎

之れを、日本民族は、「カミ」と白しまつるのである。之れが、日

本語の「カミ」の一面の解釋である。なほ言ひ換へると、小の極も神であり、大の極も神である。

此の極は、大であれ、小であれ、唯一で、有と呼ぶところの無で、無と呼ぶところの有で、無

としては、無際無涯無邊無限無始無終無生無死で、有としては、人天萬類で、無としては、「狀

ニカタキモノ貌難言」で、共に一で、一切で、ヒノカミ◎である。等しく ヒノカミ◎ではあるが、中心と外廓と、根幹と枝

葉と、本體と現象と色色様様と、其の位置と活用とを異にするままに、名稱もまた異なるのである。

が、その異るとは、それを呼ぶところの我の異なるので、物其の物の本來は、非神、非佛、非人、

非魔、小も無く、大も無く、唯一不可分超絶零界。小にあらず、大にあらず、大小にあらざるに

あらずして、大小を現はす。小と觀れば、其の極は、極底最下の一とも呼ぶべく、大と觀れば、

其の極は、極大無限の一とも云ふべし。共に之れは、純一不可分の ヒ◎である。

極大としても、極小としても、此の①は、生産靈神で、足産靈神で、玉積産靈神で、生魂で、足魂で、玉留魂で、生玉で、足玉で、玉留玉で、神で、神の稜威で、靈出で、三出で、水である。けれども、此ういふと、まるで、現代人には分らない。それで、どうか、古典をお読み下さいとおすすめるのである。

現代人には、分らないから止むを得ず方便品を立てて、大小長短の中に在る我であり、人であるとする。その小の極は、無とも云ふべき程の唯一點であるとする。其の一點の中に、人天萬類一切合切のものの種子となるべき種子の種子が在る。その種子の種子を、生産靈と呼ぶ。其の種子をば生魂と呼ぶ。其の種子が芽を出すと、それを生玉と呼ぶ。そのようにして、總べてのものが出来る。

それ故に、種子は同じで、同じように育つ。同じと云ふのは平等である。平等と云へば、無で、空で、○である。

ところが、之れは假説で、假説以上に、之れを認むることは、人間身の能きることではない。そこで、私ども人間身としては、平等は無い。従つて、同じ種子でも、萬有と成るには、直に、中心と外廓とが出来る。其の中心を、一點として、百千萬無量の點が集る。其の分分個個を、足産靈と呼ぶ。其の足産靈を統率して居ると云ふ上から、中心の一點を玉積産靈と呼ぶ。之れを統

一體だと云ふので、生産靈イグムスヒだけの生産靈イグムスヒ無く、足産靈タルムスヒだけの足産靈タルムスヒと云ふのも無く、玉積産靈タマツメムスヒだけの玉積産靈タマツメムスヒと白すことも、勿論有り得ない。唯、其の位置を異にして居る人天萬類は、相對的に人天萬類を觀るので、其の觀點を異にする上から名を別けるまでのことである。共に「カミ」で、⑤カムで、三不可分の一ヒと呼ぶのである。三にして一、一にして三、如此に、日本民族は、神の内容を學び來たつたのである。日本の古典中では、祝詞式に、此のことを能く傳へてある。

三不可分の一を、人類世界にては、太古以來、①と描き、日と稱へたので、日本民族は、特に、天照大御神と拜みまつるのであります。人天萬類の出でては歸る根本本體で、開きては、大字大宙として、天御中主神と稱へ、結びては、百八百萬魂神モモヤホヨロヅミタマノカミと白しまつる。暫も離るることのできぬ、大本オホモトツつ御祖ミオヤにてましますから、同時に總べてのものモノの等しく據るべき標識基準である。そのように、標識基準と仰ぐは、私どもの出でては歸る唯一點である。

此の一點は、我が身の上では、直日ナホヒと呼び、一家としては、家長と稱し、人類世界では、天皇と稱へまつり、人天萬類は、②ヒと仰ぎまつる。

此のを③ヒ仰ぎ、此の天皇を載き、其の家長に従ひ、各人各自に、各人各自の直日ナホヒを發き來らば、其處は高天原タカマノハラと稱へて、天照大御神の知ろしめす神界であることを、各人各自に知るのである。其の幾に、各人各自は、八百萬魂神ヤホヨロヅミタマノカミだと、古典は教へてある。其の八百萬魂神たる實を顯はす

の神であつて、分體神である。

分體神から仰ぎまつれば、全體神とも白すべき全宇宙神は、其のままに結び結びて、生産靈神・

足産靈神・玉積産靈神と稱へまつるのである。人間的に説明するのは恐多いが、純一不可分の〇

と稱へまつることの出来るので、一神である。此の一神の内容は、「天祖で、天讓日天狹霧國

禪日國狹霧尊である」と舊事紀は傳へて居り、日本紀は、「純男で、國常立尊・國狹槌尊・豐

斟尊である」と記し、古事紀は、天御中主神・高御産巢日神・神御産巢日神」と載せ、延喜式

には、「生産靈・足産靈・玉留産靈」と教へてある。先師は稜威三柱神と白されました。つまり、

三柱で、一柱で、造化三神と仰ぎまつるのである。別の御言では、二柱御祖神と白しますから、

神御産巢日御祖神で、一神で、二神で、三神で、稜威と稱へまつるのである。

その稜威とは、三出で、靈出で、稜威で、三出で、靈出で、水で、瑞で、身出で、實出で、三

不可分の〇であるとの義で、生産靈・足産靈・玉積産靈は、三にして一、一にして三にして、品

と描くので、又、二であるとの意である。

之れは、古典にあるから、一寸、御注意を願つたまでで、今は、其の三出たる神の身から、人

天萬類の發現し歸結する筋道を、我と我が身に悟證する爲に、禊祓をするので、其の禊祓の神事

に、氣吹の傳への有ることを話したいのである。

人天萬類の發現し歸結する筋道と申しますが、別の詞で云へば、物の出来では壞れ、壞れては出来する筋道である。大平等海とか、大虚空藏とか白しますところの神界を、人間的には、唯見る一圓光明の○であると言ふより外はないが、此の神界は、大の極としても、小の極としても、共に唯一の○であるから、之れを三柱としては、「イクムスヒ・タルムスヒ・タマツメムスヒ」と稱へまつり、二柱としては、「カムミムスヒ・タカミムスヒ」と仰ぎまつり、一柱としては、「ヒ」と讃ふるので、共に清音である。清み淨みて澄み切りたるなれば、カクリミ隱身にてましますのである。

此の大平等虚空藏裡の一點が、○のままに、結び結びたる時、三柱としては、「イクムスヒ・タルムスヒ・タマツメムスヒ」と稱へ、二柱としては、「タカミムスヒ・カムミムスヒ」と仰ぎ、一柱としては、「オホナホビ」と讃へまつるので、之れは、複數語を御名とせらるるのである。

「ヒ」も、「ビ」も、共に、日本語であることは、勿論で、各國各民族は、またそれぞれに、詞が異なるから、別のように聞こえるが、事實は、各國各民族共に、○^ヒであり◎^ビであるの神を傳へたのである。日本民族は、○^一で、◎^三で、○^二である日神を、天照大御神と稱へまつるのであるが、支那人は、□^一・□^三・□^二等の文字として、神界の事理を傳へて居る。此の文字は、象形であり、指事でもある。之れを傳へたる先聖の心を知るや否や、其の字形の幾變化して來た現代までも用ゐては居る。用ゐることは用ゐて居ても、それが自分等に、出發點と歸着點と、出發點即歸着點たる大道

全宇宙

多田山公遺稿

宇宙とは経緯である。

経緯の存在を云ふのであるから、在る物である。

経有り緯有る物なりとの義で支那人が此の文字を作ったのである。

現今の人々は、自分自分に、思ひ思ひに、古人の遺した言語文字を勝手な意味に用ゐる悪風が有るので、此の文字も、支那の古典としての使用法に據らず色色の意味に用ゐて居る。

或者は、太陽系だと云ひ、亦は有る限りだとか、人の知り得たる一切だとか、大虚空だとか亦或は仰ぎ見る限りだとか云つて居る。

成る程、其れ等は総べて経有り、緯有る物であるから、宇宙の外なるものではない。

けれども、之れ等は皆共に宇宙の外なるものを知らぬ人の云

ひ方である。

宇宙とは経緯である。

経緯の有る物とは箇體を指すので、大小長短広狭厚薄高低遠近深淺明暗凹凸強弱硬軟精粗疎蜜等の存在を云ふのである。

それ故に、太陽系だとか、大太陽系だとか、有る限りだとか云ふことではなくて、結晶體である。

日本の古典には之れを「産靈（むすび）」「魂（みむすび）」等と記し、各地方に「結神（むすびのかみ）」と称して奉祀されて居る。

玉の緒を結び結びて人の身は伊着くなるなる天安川。

それならば、その結晶體とは何が結晶したのか、結ぶとは何を結ぶのか、「産靈」「魂」とは抑、何であるか。

結ばれたる暁には宇宙であると支那人は傳へ、日本民族は「ミ」であると教へて居る。

「ミ」とは、身で、實で、稔で、充塞で、三で、品で、**ミ**で、**▲**で、**▼**で、火で、水で、生で、死で、生死遷流で、「イノ

チ」で、「天命」で、「地風升」で、「風地觀」で、「水火既濟」で、「火水未濟」で、「地天泰」で、「天地否」で、「陰陽不測之神」である。

故に「ミ」即「神」である。

三は神であるから、三生^ミ一^ミと傳へて、其の一とは十としての一で、皇で、九の統一體であるとの意である。

三即神で、即十で、即一で、即ヒ、即ミ、即ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリであつて全宇宙と呼ぶべきである。

統一魂神である十魂尊師である十種神寶で、完全に統治せられたる國である。

大國魂神で、大國主の主りましますところである。

世上、出雲系の神と称するは幽鬼妖魔が日神を拝して神と化したるを指せる名称なりしもの、何時の間に人間身造作の神話と化したのである。

アチメアチメアチメアチメアチメ。

ヒフミヨイムナヤココノタリ

ヤモモチチミテリ。
アアヒガテンジンユウアイコウ。

八雲琴我が掻き鳴らす束の間を人こそ學べ身をば捧げて。

八雲琴我が掻き鳴らす神の聲神寄板に今日も昨日も。

フルコトノフミミチワケテワガヒクヤカミノヲゴトノコロロコロロニ。

「古」を「イニシヘ」と訓む。
過去の住處（すみか）との義で時間無きの時間、空間無きの空間である。

故に、無宇宙で、無人無境で、無始無終無盡無邊で、**ミ**と支那人は描いたのである。

○は零で、靈で、十は**ミ**である。

ミと○との合成であるから、○なる無宇宙と、**ミ**なる宇宙とを图示したのが、時間と空間とを説明すると共に其の主體と活用とを暗示したるものである。

之れを「カミヨ」とも「トコヨ」とも「タマシヒ」とも「タカマノハラ」とも云ふので、一圓晃耀の日神である。

天地の神にぞ祈る我が心大空の如くあるべく。

アチメアチメアチメアチメアチメ。

アメツチノカミノコロヲコロニテキツキナシタルアシハラノクニ。

波の音遠く聞こえて入江には人こそ集へ船出すらしも。

あさもよし城の上の宮は神ながら神のうけひて神しらすまにアチメ オオオ。

アアヒガテンジンユウアイコ以上。

昭和十一年九月二十二日

大日本祓禊所 語部宮

全宇宙(三)

多田山公遺稿

月宿る蓮の広葉我が君の賞でてぞ遊ぶ瑠璃の御園は。

瑠璃の園月こそ宿れ蓮葉の広葉動(以下不明)

あちめあちめあちめあちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ。

山祇の神の宇氣比豆賜ひたる山野の御食を神ぞ治らする。

あちめあちめあちめあちめあちめ。

以上。

昭和十一年九月二十二日

多田雄三筆録

産み出すことの嬉ししと人皆は立ち騒すなれ身をば捧げて。

人は必しも、生産をのみ喜び楽しむと云ふわけではない。

破壊することを楽しみとする場合も、苦しみ悩まして快しとすることも有る。

けれども、極度に快楽を感じるのには創造であり生産である。

産出する為には全力を盡し、全身を捧げて悔ひざるものである。

結びては嬉しかりけり束の間を人こそ囃せ千歳とは見て。

「黒闇淵を蔽ふへり。」之れを「エホバ」と名づけて

○なる火なり。
なりとは一(ひ)なる四(よ)

なり、田なり畠なり四象なりとの義にして、以てにして火にしてへにしてににしてににしてににしてににして天地に先ちて存する物」なる物なり。

零なる靈にして「陰陽不測之神」にして「水火既濟」にして

三三にして空なる實なれば、完全圓滿なる身にして實にして、充塞し稔りたる物なり、三なるなれば一にして〇にして十にして

〇にして火なる日なり光なり。「神光有れと云ひたまひければ光あり」と云へる光にして、之れを水とは云へるなり。

以てを分ちたる水なり水なり水なりなりなり 申なり申なりなりなり。

而して稜威(みづ)なり瑞祥(みづ)なり(みづ)なり(みづ)なり。

「みづ」にして「みづつ」にして〇(ひふみ)にして一二三にして、空にして實にして有にして無にして大極にして小極にして窮数にして満数にして

「天の水と地の水とに分ち給へり。則斯くなれり。」と云へる天地の水にして、火水未済にして

水火既済にして天地否にして天地泰にして湯なりと支那人の言へたる「ゆ」にして、水火(へり)にして〇の産出したるなり。

両者合体して新なる箇体を築き成したり、子孫を産出したる事業を成就したりとの義なり。

此の身、此のままに新なるを築き成したるを大死なり再なり再臨なり涅槃なり。

釈迦にして、基督にして、エ孫にして、天子にして、神人なり。

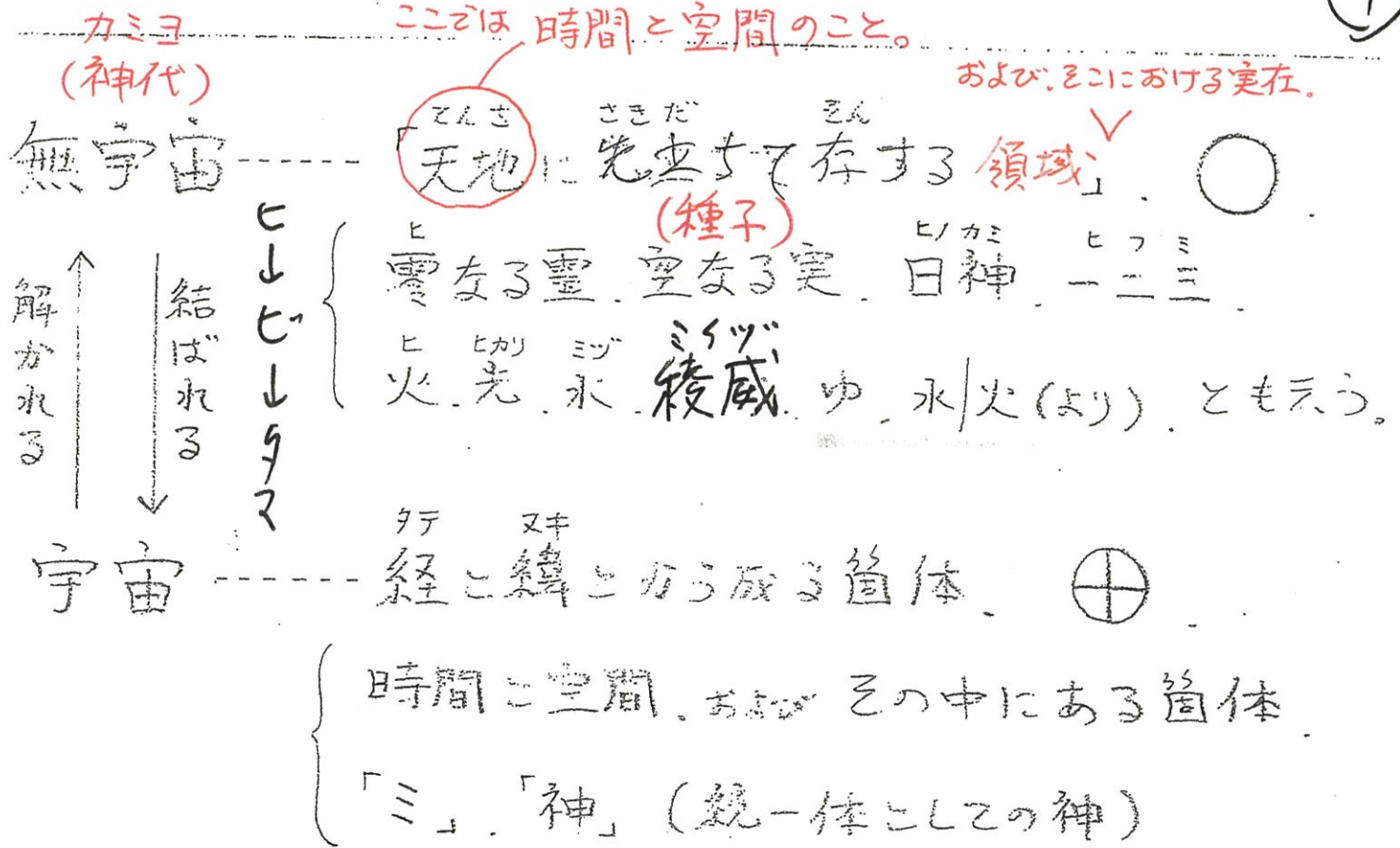
圓滿具足せる身なれば十種妙宝(とをかみ)と称へ、饒速日尊と讚美して死者の蘇りたるなり。

はるひひめはるひひめはるひひめ。

あちめあちめあちめあちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあい。

昭和十一年九月二十三日 以上

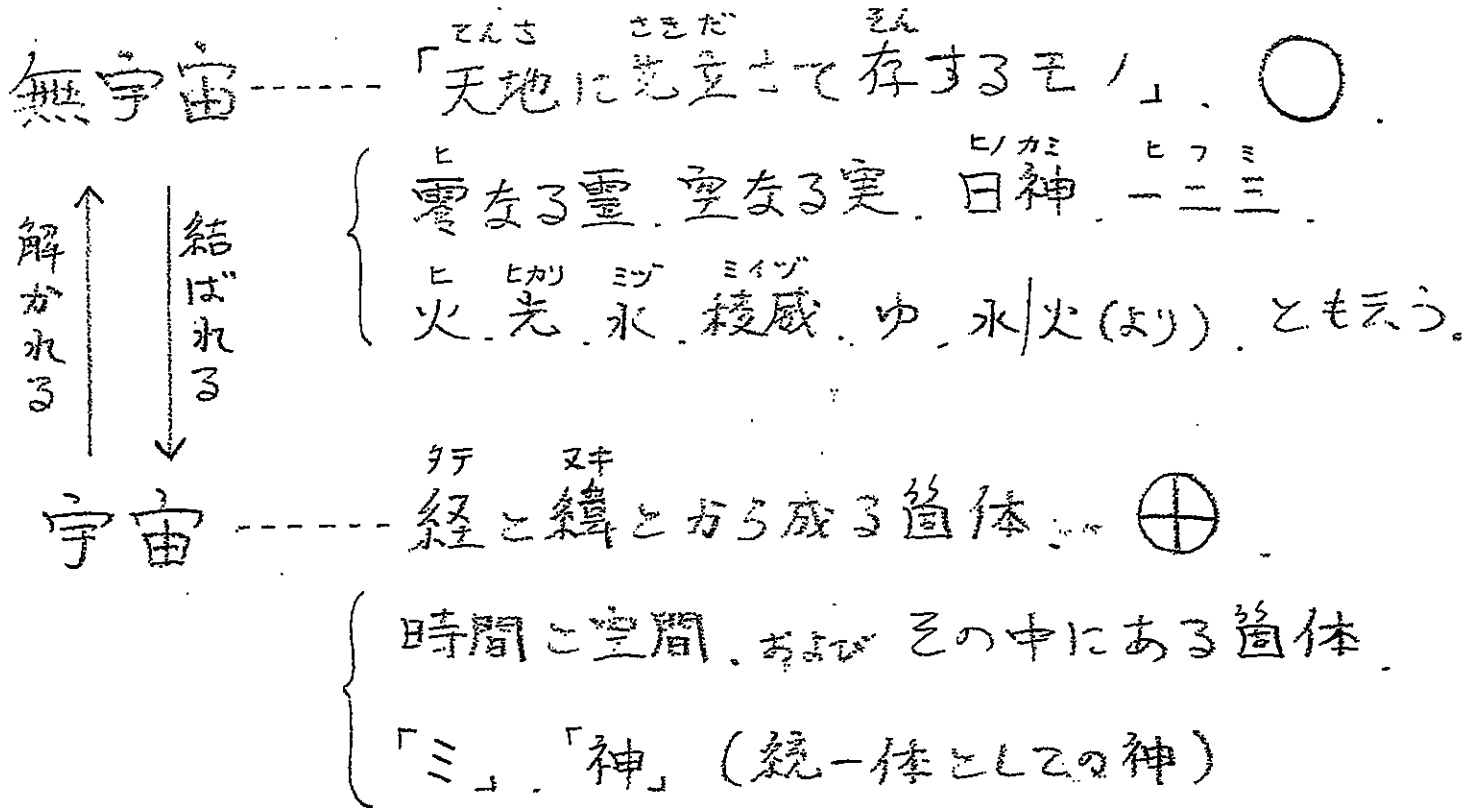


また、多田雄三は「古」という漢字を「十」と「口」とに分解した上で、その「口」は ○ の楷書であり、その「十」は、⊕ の省略形である、と解釈している。

○ ----- 無宇宙。零で霊で。時間や空間を脱却して
それらを産み出しているところの「主体」。

⊕ ----- 宇宙。上に述べた「主体」の「活用」として
表出されたところの時間と空間。

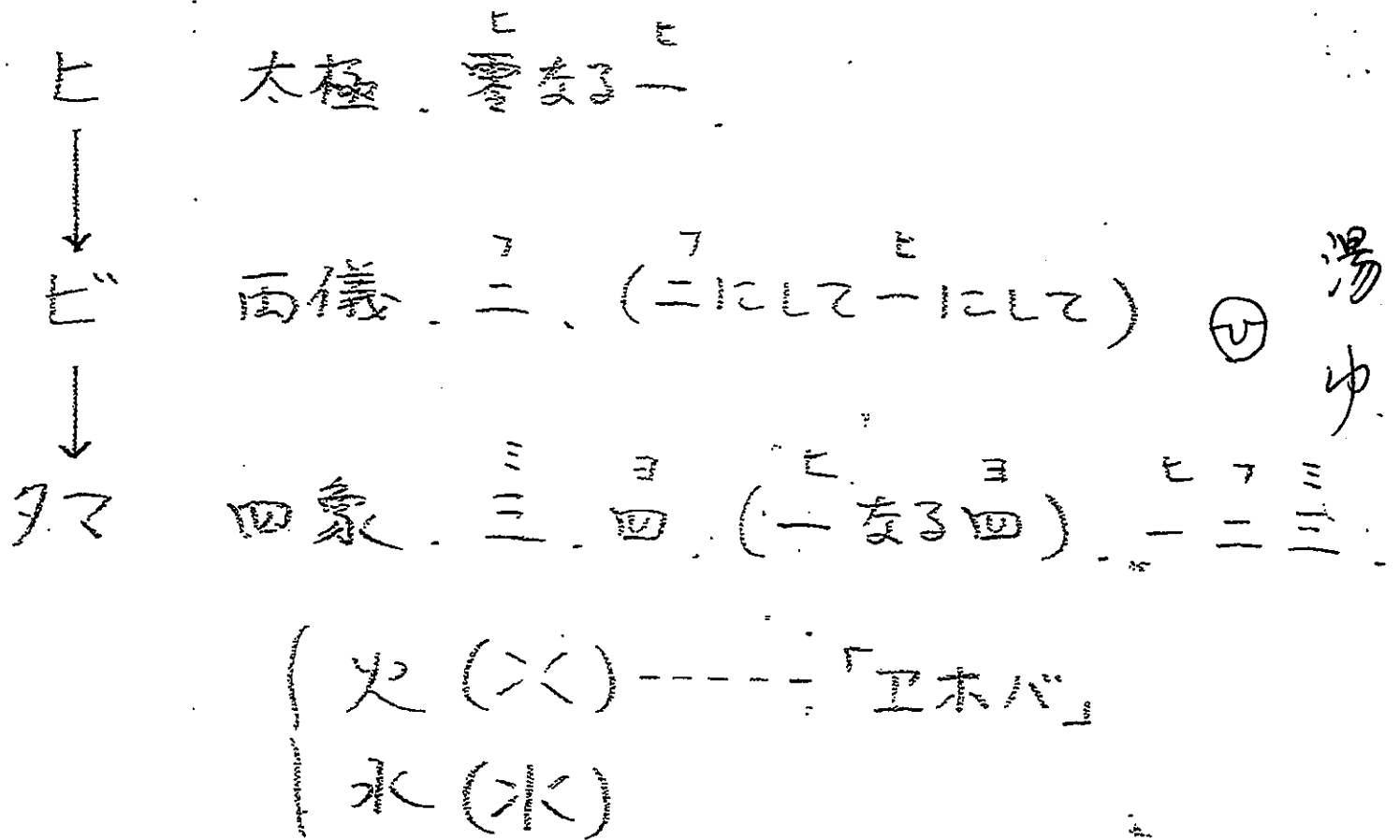
秘稿「全宇宙」のまとめ



また、多田雄三は「古」という漢字を「十」と「口」とに分解した上で、その「口」は ○ の楷書であり、その「十」は ⊕ の省略形である、と解釈している。

- ----- 無宇宙。零で霊で。時間や空間を脱却してそれらを産み出しているところの「主体」。
- ⊕ ----- 宇宙。上に述べた「主体」の「活用」として表出されたところの時間と空間。

全宇宙 (二) より



→ 以上まとめて「天地に充ちて存する物」
 「陰陽不測之神」

以上すべて「無宇宙」の話。

拙稿「数理(一)のまとめ」参照。



無

ヒの段階

↓
ムスビ
産靈

種子の種子 (イムスビ、タルムスビ、タマツメムスビ)
→ 一、^ヒ火、^ヒ零海の^ヒ零 (太極)

宇

ヒの段階

↓
ムスビ
産魂

種子 (イムスビ、タルムスビ、タマツメムスビ)
→ 二、^フ經 (經過) (兩儀)

宙

タマの段階

発芽したる種子 (イウタマ、タルタマ、タマトマルタマ)
→ 三、^ミ身 ; 同時に、^ヨ四、^ヨ世 (四象)
(ヨ、は無宇宙と宇宙の間を遷流する)

ミヅガキ
瑤垣

宇

宙

「完全に成立した箇体」の段階 → ^イ五

{ 中心 ----- 種子 (ヒフミヨ)
外郭 ----- 資料 (ム、空零、ウシビ) 六 4

→ 即ち「空零」とは、まだ「箇体」の中に組み込まれていない、「遊離した資料」である。「零」と同質ではあるが、もはや「中心」を形成する可能性はなく、その点が「一」とは全く異なっている。

<「ヒ」の存在様式の三段階、まとめ>

() 内は「霊の幸」の頁数、< > 内は「修験講義録」の頁数。

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの。○

① { 純一不可分の^ヒ零 (90) . 純一不可分の^ヒ靈 <80> .
^{ミムスヒ}三産靈 (^{イクムスヒ}生産靈 ^{タルムスヒ}足産靈 ^{タマフメムスヒ}玉續産靈)
^ミ実としての^{ミタマ}御靈 (以上、130) .

これが ↓ ^{ムスビムスビ}産靈産魂て

2. ○と○との複合体。⊙ (136) . ⊕ (68) . ⊖ (72) .

② { タマノヲ、ミヅホ、イノヲ、千變万化する^{ラシビ}靈魂、ヒの活用 (89)
^{ヲテ}経と^{メキ}續、^ヲ男と^メ女、^メ凸と^メ凹と (91) . タカミムスビとカミミムスビ (68)
^{ミムスビ}三産魂 (^{イクムスビ}生魂 ^{タルムスビ}足魂 ^{タマフメムスビ}玉留魂)
^ミ身としての^{ミタマ}御魂 (以上、130) . 三不可分の^ヒ魂 <80> .

その種子が ↓ 芽をますと <84>

3. 合体としての成立。⊙ ⊕ ⊖ (36) . ⊕ ⊖ (78.末)

③ { ^{ヲテ}経と^{メキ}續との相交わりたるもの (91) .
^ヒ不-不二不三の玉 (^{イクタマ}生玉 ^{タルタマ}足玉 ^{タマフメタマ}玉留玉) <80>
人間身の上では ^{ナホヒ}根本魂 直日 <132>

結繩

p2 ~~下~~ 段末付より

多田雄三は基本的に易經の既存の解説を
全否定する立場を取る。孔子批判もその一環。

孔子の云う数理（奇数—天、偶数—地）を批判して、述べる。

1、天であり、地でもある。（太極）陽極でもあり、陰極でもある。但し、無極ではない。
2、基本的には地であるが、また天でもある。

3、基本的には天であるが、また地でもある。

箇体成立のための「資料」でもある。

4、地でもあり、天でもある。（種子）ここでは「箇体としての原形」の意味。

5、天でも地でもある。（成数）「箇体」として成立したの意味。

6、天でも地でもない。（空零の数）箇体からはみ出した「零」のこと。

7、地（天を産出するところの地）

（としてまとまりを失う。「外郭」）

8、天地（天地開閉の数）天返えのようには戻って来る「や」の作用をささぐ。

9、天（地を築きなすところの天）善美を極めたもので「数の限り」九重。

10、天地（陰陽統一の数）統一魂

九が完全に統一した状態のこと。

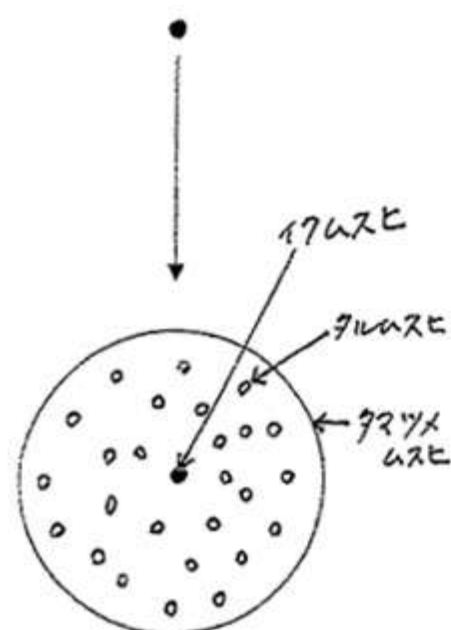
完全なる統一体たる「実」を現した状態。

九魂の意味内容

無宇宙に充満する「零」そのもの。「内部構造」はない。

一切合切の種子となるべき「種子の種子」

ミムスビ^{ミムスビ}三産靈（これが多数累積してミムスビ^{ミムスビ}三産魂となる）



その際「中心」となれば、イクムスビ

「外郭」となれば タルムスビと呼ばれる。

しかし、その「役割」は固定されておらず、

イクムスビとタルムスビの間に本質的な違いはない。

(中心) (外郭) (全体)
イクムスビ + タルムスビ = タマツメムスビ
であるものと、ここでは考える。

ミムスビ^{ミムスビ}三産魂

ミムスビと違い、一定の「内部構造」を持つ。

即ち「結び結びたる身」である。

これが人天万類一切合切の「種子」となる。

以上は、神界^{カミヤ}の話だが、こうして出来たイクムスビ・タルムスビ・

タマツメムスビがさらに多数累積して^{ミツガキ}瑞垣を超え、時間・空間という枠組みの中で活動し始めると（即ち「芽を出す」と）、それはイクタマ・タルタマ・タマトマルタマと呼ばれる。

人天万類一切合切は、これによって生じる。

上の段階

イラムスと
生産霊 (中心)

+

タルムスと
足産霊 (外郭)



ビの段階

タマツメムスと
玉積産霊 (全体)

このタマツメムスとが⇒

中心となれば、
生魂 イラムスと

+

外郭となれば、
足魂 タルムスと



タマの段階

全体を称して
玉積魂 タマツメムスと

このタマツメムスとが⇒

中心となれば、
生玉 イクタマ

+

外郭となれば、

足玉 タルタマ



留玉

全体を称して

玉留玉 タマトルタマ

<「ヒ」の存在様式の三段階、まとめ>

() 内は「言霊の幸」の頁数、(> 内は「修禊講義録」の頁数。

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの。 ○ ^ヒ

{ 純一不可分の^ヒ零 (90) 純一不可分の^ヒ霊 (80)
ミムスヒ イクムスヒ クルムスヒ タマフメムスヒ
三産^ヒ霊 (生産^ヒ霊 足産^ヒ霊 玉積^ヒ産^ヒ霊)
ミ ミタマ
実としての御^ヒ霊 (以上、130) }

これが ↓ ミスビムスビ
産^ヒ霊産^ヒ魂て

2. ○ ^ヒ と ○ ^ヒ との複合体。 ◎ ^ミ (136) . ○ ^フ (68) . ○ ^{カミ} (72) .

{ タマノヲ、ミヅノ、イノヲ、千變万化する^{フシビ}靈魂、ヒの活用 (89)
ヲヲ スキ ラ メ メ
経と緯 男と女 凸と凹と (91) タカミムスビとカムミムスビ (68)
ミムスビ イクムスビ クルムスビ タマフメムスビ
三産^ヒ魂 (生^ヒ魂 足^ヒ魂 玉留^ヒ魂)
ミ ミタマ
身としての御^ヒ魂 (以上、130) 三不可分の^ヒ魂 (80) }

その種子が ↓ 芽をえすと (84)

3. 筒体としての成立。 ○ ^ミ . □ ^ヒ . □ ^ヒ (36) . ○ ^{メラ} . ○ ^ヒ (78.末)

{ タヲ スキ
経と緯との相交わりたるもの (91)
ヒ イクタマ クルタマ タマフメタマ
不^ヒ一不^ヒ二不^ヒ三の玉 (生玉 足玉 玉留玉) (80)
人間身の上では 根本^{ナホヒ}魂直日 (132) }

「直日（ナホヒ）」の現代的解釈について

中村天風著「真人生の探求」（二十九頁）潜勢力の発現の項において、

真理に因^よつて作られた現象界に、真理に因^よつて生み出され、真理に因^よつて活^いかされている人間の人生解決は、ただ真理一本だけ、他に何物もないのである。

その真理とは何？

曰^{いわ}く「造物主が、人間各自に、自己人生の一切をこれを以つて解決し、完全に万物の靈長たるの資格をこれを以つて發揮し、また、これを以つて宇宙原則に即応する人間の大使命を遂行せよとの意図を以つて、その生命の内奥に、何人にも公平に賦与された潜勢力の發揮」、即^{すなわ}ち、これである。

と、述べられています。

この「説明」が、即ち、神道における「直日（ナホヒ）」の意味であると考えられます。